



大会の経験、人のつながり生かして活躍を

読売新聞教育ネットワーク記者 伊藤 彰浩

北海道から沖縄まで、微生物から工業製品まで、農産物の産地から都市部での商品開発まで――。みなさんの活動を紹介する「読売SDGs新聞」特別号の編集に携わり、全出場校から出されたパワーポイントを拝見しました。環境を守ろうという動きの広がりが文章と写真からよく伝わってきました。

環境大臣賞を受賞した栃木県立矢板高校、農業経営科農業技術研究部畜産班の取り組みでは、輸入飼料に頼らない放牧牛の飼育から始まり、流通や販売まで視野に入れた、地域の方々と一体となった努力が印象に残りました。

また、読売新聞社賞を受賞した愛媛県立長浜高校でのブリの中落ちを利用した缶詰づくりでは、地元の特産物を活用して、栄養豊富でおいしい食品作りにつなげるという地に足のついた取り組みに力強さを感じました。

ほかにも、環境再生保全機構理事長賞、熊本県立熊本農業高校での養豚に関わるゼロエミッションへの取り組み、国連大学サステナビリティ高等研究所所長賞、青森県立名久井農業高校での節水型の水耕栽培など、学校での学習をさらに発展させたレベルの高い発表もありました。すべての応募作に触れてみると、高校生の環境への取り組みの幅広さと奥の深さが実感できました。

今回の大会では、関東地方大会の審査に参加しました。しっかり準備されたプレゼンテーションのレベルの高さに目を見張りましたが、なによりも印象深かったのは高校生のみなさんが、発表や表彰の後に隣のテーブルに声をかけ、別のチームと交流している姿でした。人と人とのつながり、これが大きな力になり、活動の礎になるのは間違いないことと思います。

活動に参加されたみなさんは、今後、学校を卒業し、家業を継いだり、企業や政府、自治体で働いたり、大学や専門学校へ進学したりさまざまな道を歩むことでしょう。活躍の舞台はさらに大きくなります。

広い視野から環境を考えるために、2023（令和5）年版の「環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」をみてみます。そこには、「気候変動と生物多様性の現状と国際的な動向」として、人間社会が発展できる活動の限界である「地球環境の限界（プラネタリーバウンダリー）」といった考え方、企業と自然に関する情報開示の枠組みである「自然関連財務情報開示タスクフォース(TNFD)」といった仕組みなどが示されています。



環境は地球全体、わたしたちの生活のすべてに関わる問題です。脱炭素化や再生可能エネルギーの導入などを地域で行いながら、地球規模でも環境を考えてみる、経済や社会の仕組みの中でも環境を考えるとといった多角的、多層的な取り組みが必要です。

大会に参加したみなさんはこれまで、成果を後輩に伝え、地域に広げる活動に携わってきました。この経験や人のつながりを基にし、さらなる活躍を期待します。

大会に参加したみなさんはこれまで、成果を後輩に伝え、地域に広げる活動に携わってきました。この経験や人のつながりを基にし、さらなる活躍を期待します。

読売新聞社では、朝刊全国版で「SDGs@スクール」という学校での取り組みを紹介するコーナーをもうけているほか、「2030 SDGsチャレンジ」というタイトルで学校の取り組みを応援しています。また、身近な取り組みをまとめた「読売SDGs新聞」（タブロイド判）などの教材を発行し、子どもたちの実践をサポートしています。

取り組みを全国に知らせたいという学校・団体があれば、ぜひ情報をお寄せください。

